



図1-12 中妻三十三郷の城館  
(水戸市内に限る。)

中妻三十三郷は江戸氏の基盤となった支配地域です。現在の飯富・赤塚・双葉台・内原中学校区と笠間市の一部の範囲に広がり、多くの城館が築られました。



佐竹義宣肖像(天徳寺所蔵)

佐竹義宣(1570-1633年)は、秀吉の後ろ盾のもと常陸国の統一を達成し、居城を水戸城に移しました。1602(慶長7)年に出羽国に転封しました。



八幡宮本殿(八幡町/国指定重要文化財)

水戸八幡宮本殿は1598(慶長3)年に建築されました。豪放な木割り<sup>きわり</sup>りと洗練された彫刻が特徴で、水戸地区の桃山時代を代表する建造物です。

## (4) 近世(江戸時代)

### ① 水戸徳川家の成立

1600(慶長5)年の関ヶ原合戦後から2年後の1602(慶長7)年、佐竹義宣は突如<sup>で</sup>出羽国(秋田県)に転封(移転)となります。代わって徳川家康の5男・武田信吉が下総佐倉4万石から水戸15万石の領主となりました。しかし、信吉は翌1603(慶長8)年に死亡し、家康の10男長福丸(後の紀州藩初代藩主頼宣)が水戸20万石の領主となりました。1609(慶長14)年、頼宣は駿河・遠江・東三河50万石に転封となり、代わって11男頼房が下妻より25万石で入城しました(1701(元禄14)年に35万石)。この徳川頼房を初代として、水戸徳川家は11代にわたって水戸藩を領し、御三家の一つとして列せられるようになりました。



- 大掾氏時代の城域
- 江戸氏時代に拡張
- 佐竹氏時代に拡張
- 水戸徳川家時代の惣構

**水戸城と城下町の構造 (国立公文書館内閣文庫所蔵「常陸国水戸城絵図」／国指定重要文化財を改変)**

水戸城は中世初頭から近世前期まで、大掾氏・江戸氏・佐竹氏・水戸徳川家が城主となり、城を徐々に拡張していきました。最終的には主郭である下の丸・本丸・二の丸・三の丸の四つの主郭を中心に、その東西の城下町(上町・下町)を堀や土塁で取り囲む惣構を築きました。

**② 江戸時代前期**

頼房は1625(寛永2)年、水戸城東方の低湿地を埋め立てて新たに<sup>したまち</sup>下町を造成するなど、同年から1638(寛永15)年にかけて城郭及び城下町の整備を行います。この結果、水戸城下町は水戸城主郭(下の丸・本丸・二の丸・三の丸)を中心に、西方の台地上に<sup>うわまち</sup>上町、東方の低地に下町が展開する、全国的にも特異な双子町の構造となりました。

1661(寛文元)年、頼房の3男で第2代藩主となった光圀は、藩内整備を強力に推進した藩主として知られています。翌1662(寛文2)年には下町の飲料水不足解消のため笠原水道(笠原町ほか)を開設したのを皮切りに、<sup>ときわ さかどまうづぼち</sup>常磐・酒門共有墓地の設置(松本町・酒門町、1666(寛文6)年)、<sup>りゅうてい</sup>柳堤の築堤(1690(元禄3)年頃)等の施策を次々と実施し、その後の水戸城下町の都市計画に大きな影響を及ぼしました。

さらに、光圀は文教政策にも力を入れ、史書『大日本史』の編さん<sup>だいにほんし</sup>に着手したことは有名です。<sup>せいし</sup>世子(跡継ぎ)時代の1657(明暦3)年に江戸駒込の水戸藩邸に史局を設立したのがはじまりで、1672(寛文12)年、史局は「<sup>しやうこうかん</sup>彰考館」と命名され正式に開館しました。1698(元禄11)年には水戸城二の丸内にも彰考館を設置し、史書編さんは江戸彰考館(江



徳川光圀肖像(立原杏所筆、茨城県立歴史館所蔵)

徳川光圀(1628-1700年)は、水戸藩2代藩主です。数々の重要な施策を行い、水戸藩の基礎を築きました。「水戸黄門」のモデルとしても有名です。



笠原水道  
(笠原町外/県指定史跡)

徳川光圀の命により、1663(寛文3)年に竣工した上水道です。総延長は10,751メートルに及び、当時としては珍しい暗渠水道でした。



『大日本史』(刊本、水戸市立博物館所蔵)

神武天皇から後小松天皇までの治世を記した全402巻の歴史書です。光圀死後も編さんは続けられ、完成したのは1906(明治39)年のことでした。

館)と水戸彰考館(水館)の2か所で約130年間にわたって行われましたが、1829(文政12)年に江戸彰考館が廃止となり、史局は水戸彰考館に統合されました。

光圀による史書編さん事業は、幕末期に『大日本史』が全国の藩校等の学校に備えられたことはもとより、『礼儀類典』、『万葉代匠記』等の様々な関連書の刊行、上侍塚古墳・下侍塚古墳(栃木県大田原市/国指定史跡)の発掘(1692(元禄5)年)など、多方面に及び、水戸藩の学問的伝統は近世日本における学問・教育の発展に大きく寄与しました。

編さん事業は光圀死後(1700(元禄13)年)も近世を通じて継続され、完成を見たのは1906(明治39)年のことです。

1690(元禄3)年、第3代藩主となった徳川綱條は、深刻化する財政難を解消するため、宝永の新法と呼ばれる財政改革に着手します。この改革は1703(元禄16)年から1709(宝永6)年にかけて実施され、藩札の発行や松波勘十郎による紅葉運河・大貫運河の開鑿事業等が行われました。しかし、重い負担に耐えかねた百姓たちが1708(宝永5)年から翌年にかけて一揆を起こし、勘十郎父子の追放によって改革は挫折しました。



(所名戸水)  
ふ偲を偲の昔  
關主天城戸水舊

水戸城天守(三階櫓)古写真(水戸市立博物館所蔵)

水戸城の天守は二の丸にあり、1764(明和元)年に焼失し、1771(明和8)年に再建されました。外観は3層、内部は5階建ての櫓形式で「御三階」などと呼ばれていました。



此君堂跡(立原翠軒屋敷跡、柳町2丁目)

立原翠軒(1743-1823年)の屋敷跡です。翠軒は停滞していた『大日本史』編さん事業を軌道に乗せるとともに、藤田幽谷や小宮山風軒等の人材を育てました。

### ③ 江戸時代中期

1718(享保3)年、第4代藩主となった徳川宗堯も財政難の解消に取り組みますが(享保の新政)、1730(享保15)年に急死します。同年、第5代藩主となった徳川宗翰の代に、幕府の命による財政改革が実施されますが、十分な成功を収められませんでした(寛延・宝暦の改革)。1764(明和元)年には水戸城が出火し、屋形(御殿)や天守(三階櫓)以下をことごとく焼失したほか、1765(明和2)年には城下町の大火が起こり、下町がほぼ全焼したとされています。

同年、第6代藩主となった徳川治保は、長きにわたって藩主を務めました。治保は前代から引き継いだ財政危機とともに、天明飢饉による農村の荒廃に対応するため、産業振興や農村の立て直しに力を注ぎました。また、停滞していた『大日本史』編さん事業の再興をはじめ学問重視の姿勢を打ち出し、長久保赤水、立原翠軒、藤田幽谷ら優秀な人材を登用しました。

### ④ 江戸時代後期

1805(文化2)年、第7代藩主となった徳川治紀は外国船の接近に備え軍制改革に着手します。こうした治保・治紀の文武両面にわたる治世は、後の第9代藩主斉昭による改革の先駆けとなりました。



徳川齊昭肖像(幕末と明治の博物館所蔵)

徳川齊昭(1800-1860年)は水戸藩9代藩主です。幕末に藩政改革を断行するとともに、幕政にも積極的にに関わり、藩内外に影響力を及ぼしました。



会沢正志斎肖像(個人所蔵)

会沢正志斎(1782-1863年)は幕末を代表する学者です。藤田東湖とともに徳川齊昭の政治を支え、著書『新論』は尊王攘夷運動に大きな影響を与えました。



藤田東湖肖像

(幕末と明治の博物館所蔵)

藤田東湖(1806-1855年)は藩主齊昭の信任を経て藩政や幕政に関わるとともに『弘道館記述義』『回天誌史』を著し幕末の志士の信望を集めました。

1816(文化13)年に第8代藩主となった<sup>なりのぶ</sup>齊脩の代になると、諸外国の船が頻繁に現われ、1824(文政7)年には<sup>おおつはま</sup>大津浜(北茨城市)にイギリス人が上陸する事件が起こります。幕府の対外政策に危機感を募らせた<sup>あいざわせいしさい</sup>会沢正志斎は『<sup>しんろん</sup>新論』を著して<sup>じょうい</sup>攘夷を主張するなど、水戸藩は攘夷の急先鋒として全国から注目を集めるようになっていきます。

こうした国内外の経済的危機と政治的危機を乗り越えるべく、藩政改革に取り組んだのが1829(文政12)年に就任した第9代藩主<sup>なりあき</sup>徳川齊昭でした。齊昭は、<sup>ふじたとうこ</sup>会沢正志斎や藤田東湖といった学者を登用し、藩政の改革に乗り出します。

藤田らの主張は実践的かつ藩を超えて日本一国を対象とした点に大きな特徴があり、彼らの主張や著作は幕末の思想に大きな影響を与えることになりました。

齊昭は就任直後から藩政改革に着手し、儉約の徹底、軍政改革と追鳥狩の実施、藩内総検<sup>けん</sup>地、藩校弘道館の建設、偕楽園の造成、郷校の増設、江戸定府の廃止、社寺改革、<sup>しやくさんこうぎょう</sup>殖産興業等多岐にわたる施策を実施しました(天保の改革)。

しかし、急激な改革に反発する勢力も現れ、1844(弘化元)年に幕府から<sup>ちつきよきんしん</sup>蟄居謹慎を命じられます。



弘道館(三の丸／国指定特別史跡)

弘道館は旧水戸藩の藩校です。斉昭が推進した藩政改革の重要施策の一つとして1841(天保12)年に開設され、文武の多様な教育が教えられていました(→56ページ)。



偕楽園(常磐町／国指定史跡・名勝)

偕楽園は斉昭自ら造園構想を練り、1842(天保13)年に開園した大名庭園です。庶民に開放する目的を掲げるなど近代の公園に近い性格を持っていました(→57ページ)。

⑤ 幕末期

1844(弘化元)年に第10代藩主となった徳川慶篤よしあつの代には、斉昭の復権を目指す改革派と門閥派もんぼつはとの対立が深刻化していきます。こうした中、1853(嘉永6)年にペリーが来航し、開国を求めたことから、我が国の歴史は大きな転機を迎えます。

同年、斉昭は幕府から海防参与かいぼうさんよに任じられ、水戸藩は幕末の国政に深く関与することとなりました。特に、日米修好通商条約にちべいしゅうこうつうしょうじょうやくの調印問題に加え、第13代將軍家定いえさだの後継をめぐる争いは、彦根藩主井伊直弼いなおすけら南紀派と、斉昭ら一橋派ひとつばしはに二分され、幕府・朝廷・諸大名・尊攘志士そんじょうししらを巻き込む全国規模の政争に発展し、水戸藩は一橋派の頭目とうもくと目されるようになりました。



1858（安政5）年、大老に就任した直弼によって条約は調印され、南紀派が推す徳川家茂<sup>いへ</sup>が第14代将軍となります。斉昭・慶篤をはじめ一橋派の諸大名は処罰され、尊攘志士に対する弾圧が行われます（安政の大獄<sup>あんせい たいごく</sup>）。1860（万延元）年、弾圧に怒った水戸浪士らが直弼を暗殺する事件が起き（桜田門外の変<sup>さくらだもんがい へん</sup>）、その5か月後に斉昭が死去します。強力な指導者を失った藩内は、激派<sup>げきは</sup>（尊攘急進派。天狗党とも呼ばれました。）、鎮派<sup>ちんぱ</sup>（尊攘穏健派）、諸生派（門閥派）等の派閥が主義主張をめぐって分断し、内部抗争化していく中で、国政における水戸藩の求心力は急速に低下していきました。

1867（慶応3）年、斉昭7男で第15代将軍の徳川慶喜<sup>よしのぶ</sup>が大政を奉還<sup>ほうかん</sup>し、2世紀半続いた江戸幕府を終焉させるといふ、重要な決断を行う一方で、水戸藩内では1864（元治元）年から1868（明治元）年にかけて、筑波山拳兵、那珂湊の戦い、天狗党の西上<sup>さいじょう</sup>、敦賀での処刑、本圀寺勢<sup>ほんくわんじせい</sup>の下向<sup>げきこう</sup>、北越戦争、弘道館の戦い、松山戦争など、各派閥が複雑に絡み合う紛争が繰り広げられ、水戸藩は国政に主体的に関わることなく、明治維新を迎えます。

## (5) 近・現代（明治時代～）

### ① 水戸市の成立

1868（明治元）年、水戸藩最後の藩主に就任したのがパリ留学を経験した徳川昭武<sup>あきたけ</sup>です。昭武は新政府に応じる形で藩内改革に取り組み、翌年版籍奉還<sup>はんせきほうかん</sup>によって知藩事<sup>ちはんじ</sup>となってからも北海道開拓に意欲を示しますが、1871（明治4）年の廃藩置県<sup>はいはんちけん</sup>により、水戸藩は廃藩となりました。

水戸藩は水戸県と名称を変え、その後周辺の県の統廃合が進む中で茨城県が誕生します。茨城県庁は旧弘道館に置かれ、後に弘道館調練場跡<sup>ちようれんじょう</sup>（現在の茨城県三の丸庁舎）に移転します。1999（平成11）年に笠原町へ県庁が移転となるまで、水戸城跡周辺は中～近世に続いて政治の中心地として機能していきました。

しかし、藩から県への移行は必ずしもスムーズに進んだわけではなく、1872（明治5）年に水戸城が何者かに放火されました。旧藩士族が新政府により水戸が支配されることに対して反発したとも考えられています。

明治政府は旧藩士族の就労を進めるとともに、水戸の商工業の振興を積極的に進めました。さらに、徳川光圀と斉昭を祀る常磐神社の創設を認め、光圀と斉昭二人に神号<sup>しんごう</sup>を与えました。こうした旧藩士族の不満を抑える努力もあり、茨城県政は少しずつ安定していくことになりました。

1889（明治22）年に市制・町村制が施行されると、上市<sup>うわいち</sup>・下市<sup>しもいち</sup>（近世の上町・下町）のほか、常磐、細谷、吉田及び浜田4村の各一部を合併し、全国31市の一つとして「水戸市」が誕生しました（関東地方では、東京市、横浜市及び水戸市の3市のみ）。また、現在の市域の他地域では、常磐村が独立の村となったほか、旧来の数か村が合併して新しい村々が誕生しました。

### ② 近代都市の発展

明治以降、全国で多くの都市的施設が徐々に整備されていく中、本市も近代都市として発展を遂げていきました。



徳川慶喜肖像写真(県立歴史館所蔵)

徳川慶喜(1937-1913年)は徳川斉昭の7男として生まれ、弘道館に通学して勉学に励みました。1866年に徳川宗家を継ぎ、第15代将軍になりました。翌年大政奉還を上奏し、江戸幕府を終わらせました。



天狗党の墓  
(福井県敦賀市／国指定史跡「たけだ こうんさいとうのはか武田耕雲斎等墓」)

1864年、筑波山を挙兵した激派は那珂湊の戦いで幕府軍に敗れた後、京都を目指し1,000人余りが行軍しました(天狗党の西上)。一行は敦賀で幕府に降伏し、翌年352人が処刑されました。



諸生派の墓(千葉県そうま匝瑳市／  
匝瑳市指定史跡「脱走塚(水戸藩士の墓)」)

1868年、匝瑳郡松山で天狗・諸生両派の最後の戦争が行われ(松山戦争)、敗北した諸生派(松山勢)の戦死者がここに葬られました。



常磐神社

常磐神社は1873年、偕楽園の一部約3万平方メートルをさいて県社として創建されました。徳川光圀・斉昭を祭神としています。



旧茨城県庁舎  
(三の丸／現茨城県三の丸庁舎)

茨城県庁ははじめ弘道館に置かれ、1882年に弘道館訓練場跡地に庁舎が建設されました。現在残るゴシック様式の旧県庁舎は1930年の竣工です。



近世城下町から近代都市への移行に際して、1873（明治6）年頃に水戸城惣構の最西端の堀が埋め立てられるなど、明治初年から徐々に城下町の遺構は解体され、都市の近代化が進んでいきました。特に1886（明治19）年、上市大火によって上市の約8割が焼失したことを契機として、県知事安田定則<sup>やすだ さだのり</sup>が1887（明治20）年に着手した市街地の市区改正事業は、1888（明治21）年の東京府による市区改正事業に先行するものであり、日本人の手による最初の都市計画と評価されています。

1889（明治22）年には、水戸鉄道の開通に伴い、商業や金融業の発展が促進されていきます。特に「水戸納豆」や「水戸の観梅<sup>かんばい</sup>」は、鉄道網の発展とともに脚光を浴び、広く知られるようになりました。

1904（明治37）年の日露戦争後、日本の軍備拡張により水戸にも歩兵第二連隊を中核とする陸軍の衛戍<sup>えいじゆ</sup>（駐屯地）が設置されました。以後、水戸は軍都としての性格も帯びるようになります。

1914（大正3）年の第一次世界大戦による国内景気の回復に伴い、造船業で急成長した内田信也<sup>うちだしんや</sup>の寄付をもとに1920（大正9）年には水戸高等学校（旧制水戸高等学校）が設立されます。同校は全国13番目の官立高等学校で、各界に多くの有為の人材を輩出しました。こうして本市は教育・文化の中心地としての機能も果たし、学都としての性格も備えるようになりました。

### ③ 戦争の拡大と終戦

1929（昭和4）年の昭和恐慌<sup>しょうわ きょうこう</sup>を経て、我が国は軍国化の道を進み、本市でも農本主義<sup>のうほんしゆぎ</sup>と国家主義の活動が活発になっていきます。1932（昭和7）年に起こった血盟団事件と五・一五事件は、大洗の護国堂に拠る井上日召<sup>いのうえにっしょう</sup>と、常磐村で農場を経営し、愛郷塾<sup>あいきやうじゆく</sup>を主宰した橋孝三郎<sup>たかはなこうざぶろう</sup>が参加し、彼らの影響を受けた本市近辺の農村青年が加わりました。

1931（昭和6）年に勃発した満州事変後、国は旧満州の実効支配を進める関東軍の戦略によって移民（満蒙開拓）が進められます。1937（昭和12）年、日本国民高等学校（現日本農業実践学園）校長の加藤完治<sup>かとうかんじ</sup>らは、政府に「満蒙開拓青少年義勇軍編成二関スル建白書<sup>けんぱくしょ</sup>」を提出し、満蒙開拓青少年義勇軍制度が開始されます。国内唯一の義勇軍訓練所として旧下中妻村に満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所が、旧河和田村に河和田分所が、旧鯉淵村に幹部訓練所がそれぞれ創設され、全国から集まった約10万人の青少年らが訓練を受け、旧満州に渡るなど、満蒙開拓政策における国内根拠地の一つとなりました。

1937（昭和12）年の日中戦争開戦、1941（昭和16）年の太平洋戦争開戦により、本市も戦時体制下となり、政治・経済統制を強いられる中、多くの市民が戦地で兵役に就くことになりました。水戸歩兵第二連隊は、日中戦争後は満州に駐屯していましたが、1944（昭和19）年にパラオ諸島ペリリュー島の守備に就き、同年11月24日に全滅（玉砕）します。

一方、市内でも多くの市民が物資の窮乏に耐えながら戦争遂行に協力しますが、1945（昭和20）年8月2日未明に起きた水戸空襲は、全市戸数の90パーセントに当たる10,104戸が罹災<sup>りさい</sup>し、死者317名以上を出す大惨事となります。市街地の大半は焼失し、水戸城三階櫓や偕楽園の好文亭等の多くの歴史的建造物やまちなみを失うなど、水戸は文字どおりの焦土<sup>しょうど</sup>となって終戦を迎えました。



1935(昭和10)年頃の観梅風景  
(出典:『水戸百年』水戸市100年委員会発行、1989年)  
水戸の観梅の始まりは1896年と言われています。1899年に運行した観梅列車が大成功を収め、水戸の早春の風物詩として定着しました。



歩兵第二連隊の営門  
(出典:『水戸百年』水戸市100年委員会発行、1989年)  
1909年、歩兵第二連隊は現在の茨城大学の敷地に当たる地に入営しました。出征や帰還時には市民総出で迎えるなど、戦争の喜び・悲しみを市民と分かち合いました。



旧制水戸高等学校  
(出典:『水戸百年』水戸市100年委員会発行、1989年)  
旧制水戸高等学校は、1920年、現在の水高スクエアや第一中学校のある一帯に創設されました。全国から学生が集まり、戦前の自由主義をおう歌しました。



満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所(所蔵:内原郷土史義勇軍資料館)  
1937年、(財)満洲移住協会が現在の小林町に建設した国内唯一の義勇軍訓練所です。敷地面積は26.7ヘクタールに及び、日輪兵舎と呼ばれる円形の建物が300棟以上立ち並んでいました。



#### ④ 戦後の水戸市

空襲により焼失した市街地ですが、1年後の1946（昭和21）年には南町商店街を中心に復興祭が行われ、翌年には観梅行事も復活するなど、復興が急ピッチで行われていきます。

こうした中、偕楽園公園とその周辺の緑地帯については、都市計画決定によって都市化の波から守られ、かつて「<sup>いっちやういっし</sup>一張一弛<sup>4</sup>」を体現する庭園であった偕楽園と千波湖を含めたその周辺が都市公園として整備されました。

戦後の本市は、周辺町村との合併を繰り返して拡大し、1992（平成4）年には常澄村との合併を行うとともに、2005（平成17）年には内原町との合併を行い、現在の市域になりました。

現在、水戸市は歴史と現代が融合した魅力ある都市として発展を続けています。



1965（昭和40）年の水戸の市街地（出典：『水戸百年』水戸市100年委員会発行、1989年）

水戸駅前（中央）から伸びる大通り（現在の国道50号線）沿いに多くの建物が立ち並んでいます。この頃、駅南側はまだ開発が進んでいませんでしたが、その後、目覚ましい発展を遂げていきました。

<sup>4</sup>一張一弛：徳川斉昭の自選による、偕楽園開園の精神を記した『偕楽園記』にある言葉で、「緊張とリラックス」の意味です。緊張して勉強に励む場（一張の場）を弘道館、休息の場（一弛の場）を偕楽園として、両者が一對の施設であることを示しています。



図1-13 水戸空襲マップ

水戸空襲で罹災した範囲を示した地図です。オレンジ色で囲われた範囲が焼失し、水戸城天守(三階櫓)をはじめ多くの文化財が焼失又は焼損しました。



現代の水戸市街地(2010年撮影)

戦災によって甚大な被害を受けた本市ですが、高度経済成長期における人口、市街地の拡大を経て、今日では人口約27万人を有する県都として、本市を中心とした県央地域のリーダーとしての役割を担っています。